

バカンスで民族大移動

国際会議に参加するため、フランスの南部のエクス・アン・プロヴァンスに行ってきた。

プロヴァンスはフランスを代表するリゾート地の一つで、多くの人がバカンスにやってくる。フランス人のバカンスは3週間とか4週間続けてとるケースが多く、エクス・アン・プロヴァンスの近くでも、調理施設が整ったアパートを借りて、そこで3週間程度の休暇を楽しむ人が少なくない。

エクス・アン・プロヴァンスは、プロヴァンスの中心の街の一

伊藤 元重 機構大教授 東大 研究員 総合理事

つで、多くの人が街にやってきてカフェなどでおしゃべりをしながら食事をしている。夜も深夜まで店が開いていて、子連れの人でも深夜まで食事などをしている。

夏のパリに行く、多くのパリっ子がバカンスをとっていなく

「長期滞在型」休暇の定着を

なる。地元の人を言葉が借れば、夏のパリからはパリっ子がいなくなり、海外からの観光客ばかりという。バカンスで民族の大移動となり、プロヴァンスなどにパリな

どから人が移動するのだ。お盆の時期の日本国内の人の移動に似た面があるが、一時期に集中するのではなく、分散して人が移動す

ること、そして長期間リゾート地に滞在するという点が、日本とは違う。

エクス・アン・プロヴァンスに私が行ったのは、そうした時期に合わせて大きな国際会議がそこで開かれたからだ。バカンスの時期

に国際会議をぶつけるというのが

興味深い。リゾート地という魅力もあって、世界から多くの人が会議にやってくる。

そしてこの時期、プロヴァンスではさまざまな催しものがある。私が行ったエクス・アン・プロヴァンスでは大きな音楽祭をやっており、オペラはロンドンフィルが来たこともあって、チケットをと

るのが大変な状況だ。近くの街のアビニオンでは、国際映画祭をやっているということだ。

さすがに、1年間に8千万人の観光客がくるフランスである。日本に来る観光客の10倍近い人数になるが、休暇を楽しく過ごすためのいろいろな仕掛けを用意している。そして、国民の間でも、夏のバカンスを家族で楽しむという習慣が定着している。それがプロヴァンスのような地方にとっても、重要な経済活性化策となっている。

ワークバランスの勧め

フランスのこうした取り組みは、日本にとっても学ぶことが多い。仕事をしている人の中には働き過ぎで、休暇もまともにとれない人が多

い。一方、仕事がなく困っている人も多

い。一方、仕事がなく困っている人も多

社会全体で適度な仕事と休暇を楽しむためには、みんなで仕事を分け合うというワークバランスの考え方が必要だ。ワークバランスがうまくいけば、それだけみんなが適度な休暇をとれるようになる。

地域社会の活性化という点でも、休暇が大きな鍵になる。海外から観光客を引きつけることも重要だが、日本国内で長期滞在型の休暇をどう定着させるかということも考えなくてはいい。1日、2日の短期の観光だけでなく、その地域の風土や食材などをじっくりと楽しむ滞在型の休暇をどう普及させていくのか。これは観光客を受け入れる地域社会にとっても大きな課題である。

大きな課題である。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。